

# 柳生宗矩と沢庵宗彭の相互影響に関する研究

塚本 大樹 (筑波大学)

## 1. 目的

本研究では、柳生宗矩が記した『兵法家伝書』と、その執筆に影響を与えたとされる禅僧沢庵宗彭の著作の著述内容の比較を行い、兵法者と禅僧という立場の違った両者が互いにどのような影響を与え合っていたのかについて明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

本研究は、柳生宗矩の著作と沢庵宗彭の著作における類似した記述表現や内容について比較を行い、両者の考えの共通性、相違性を明らかにした。

- 1) 調査方法：文献学的手法による記述の解釈考察
- 2) 対象文献：柳生宗矩著『兵法家伝書』、沢庵宗彭著『不動智神妙録』、『太阿記』、『理気差別論』

## 3. 結果と考察

### 1) 柳生宗矩と沢庵宗彭の接点・交流

宗矩と沢庵は実戦経験のある兵法者と、武芸とは無関係の禅の僧侶という全く違う身分に生まれながらも、互いに惹かれ合うものを感じ、交友関係を築くようになったのではないかと推察できた。主な交流内容としては、沢庵が宗矩の屋敷に寝泊まりしていたこと、沢庵が禅の思想を宗矩に説いていたことなどが挙げられ、両者の親密さを窺えた。

### 2) 『兵法家伝書』と『不動智神妙録』の記述表現の比較

両著に見られた表現上の類似性が見られるキーワードとしては、13項目を挙げる事ができた。顕著な例として、「磨かれた玉」の考察を示す。共通性としては両者ともに、理想とする心の状態を「みがきぬきたる玉」「よく磨きたる水晶の玉」として表し、心を止めることなく自由に解き放ち、行きたいところへやるのが良いということを述べており、記述表現、内容の共通性が見られた。相違性としては、沢庵は「よく磨きたる水晶の玉」と表現し、「蓮

の泥に染まぬが如く」というところからも、禅僧としての仏教的な思想が見て取れる一方で、宗矩は「みがきぬきたる玉」として表現しており、兵法者としての鍛錬の先に至ることのできる心の境地として、「磨きぬく」という言葉で強調したのではないかと推察された。

### 3) 『兵法家伝書』と『太阿記』の記述表現の比較

両著に見られた表現上の類似性が見られるキーワードとして「人をいかすつぎ・一剣平天下」など5項目を挙げる事ができた。

### 4) 『兵法家伝書』と『理気差別論』の記述表現の比較

両著に見られた表現上の類似性が見られるキーワードとして「戸のくるゝ」など3項目を挙げる事ができた。

## 4. 結論

考察の結果、両者は立場の違いがありながらも共通の思想や考え方をもち、その背景には親密なる交遊関係が関連していることが考えられた。また、相違性についても確認ができ、その背景には、両者の立場や人生経験の相違が影響していることが考えられた。武芸に関する記述が多く見られた宗矩に比べて、沢庵は人生全般にわたる、一般的な理想論としての心のあり方などを論じている傾向が見られた。

このことから、両者の間には、上述したような微妙な思想上の相違性が認められ、互いに兵法者と禅僧という立場を超え、交遊を深めていく過程において、相手の中に自分にはないものを見出し、刺激し合い、学び合うような相互影響の関係があったのではないかと推察できた。

## 5. 主な参考文献

- 1) 柳生宗矩著 渡辺一郎校注、兵法家伝書、岩波文庫、1985.
- 2) 澤庵和尚全集刊行会編、澤庵和尚全集、巧藝社、1929.